

| | |
|---------|---|
| 氏名 | 蘇 銀 河 そ ぎん が |
| 学位の種類 | 医学博士 |
| 学位記番号 | 論医博第77号 |
| 学位授与の日付 | 昭和38年6月25日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第5条第2項該当 |
| 学位論文題目 | A STATISTICAL STUDY OF THE VARIOUS DISEASES IN PESCADORES ISLANDS (澎湖島の疾病に関する統計的研究) |
| 論文調査委員 | (主査) 教授 近藤鋭矢 教授 荒木千里 教授 木村忠司 |

論文内容の要旨

澎湖島は四面を海に囲まれた農作物に乏しい不毛の地で、季節風が激しく、種々の生活条件は他処よりも悪い。著者は約15年間この島で診療に従事し、この島における疾病の特殊性についていささかの知見を得たので、この地における気候の特異性と悪劣な生活環境が疾病にいかなる影響を及ぼすかを究明する目的で、最近8年間(1952年4月—1960年3月)、台湾省立澎湖医院および馬公平民医院で診察した98,375例の疾病について統計的観察を行なったので、ここにその結果を報告する。

A. 統計的観察

- 1) 男70%, 女30%で、男尊女卑の觀念が女の就医率を低くしている。ただ、腸内寄生虫、恙虫病、貧血症は女に多い。男は漁業に従事し、畑仕事は女がしているためである。
- 2) 梅毒、トラコーマ、フィラリア症等は減少しつつあるが、リウマチ、肝炎、消化性潰瘍、多発性筋炎およびアレルギー疾患は近年とみに増加している。
- 3) 麻疹、水痘、急性灰白質炎のごとき伝染病は春先に多く、台湾本島の流行よりは1か月ほど遅れる。夏には腸炎、外傷、化膿性疾患および恙虫病等が多く見られ、トラコーマ、気管支喘息、気管支炎および肺炎等は季節風の激しくなる秋から冬にかけて増えてくる。
- 4) 0~4才の幼児期の罹患率が一番高く、その次は外界との接触の多い20~24才の青年で、学令期の児童(5~19才)は低い。
- 5) 罹患率の高い疾病の順位は、リウマチ(8%), 感冒(7%), 外傷(6.3%), 気管支炎(6%), 膿瘍および蜂窩織炎(4.5%), 腸炎(4.4%), トラコーマ(4.4%), 胃炎(4.2%), 肺結核(2.6%), および肝炎(2.6%)であり、この10種の疾病は全症例の50%を占める。次には、中耳炎(2.4%), 十二指腸虫症(1.6%), 結膜炎(1.6%), 湿疹および皮膚炎(1.5%), 創傷化膿(1.3%), 蛔虫症(1.3%), 癩および癰(1.3%), アメーバ性赤痢(1.1%), 多発性筋炎(1%)の順となっており、その他の疾病はそれぞれ全症例の1%以下を占めるにすぎない。以上の20種の疾病は全症例の $\frac{2}{3}$ を占める。

B. 特殊疾病

1) フィラリアの感染率は約6%で、臨床例は全症例の0.5%を占める。初期侵襲に始まり、リンパ腺炎や睪丸炎と発作を反復して、陰囊水腫、乳糜尿、象皮病と慢性の経過をたどる。

2) 恙虫病は5月から9月の間に限られ、大雨の後に発生し、女に多く、虫の螫口結痂部は、高粱の葉梢の高さに一致して、身体の約1メートルの高さの所に発見される。台東では20~30才の間に多いが、澎湖島では5~14才の間に多く、40%を占める。

3) 癩病は漁民の間に、特に20~40才の間に多く見られ、特に Tuberculoid type が45%を占め一番多い。

4) 多発性筋炎は5~9才の小児に多く、14才以下の児童は全症例の70%を占める。19才以下では男に多いが、20才以上では女の症例が多い。栄養失調ことに B₁ 欠乏が関係するように思われる。

C. 伝染病

1) アメーバ赤痢は急性伝染病の28.6%を占め最も多い。その中の0.2%に肝臓膿瘍を併発している。麻疹は男よりも女にやや多く、小さい離れ島では青年や老人にも発生流行することは注意を要する。急性灰白質炎(脊髄性小児麻痺)は近年増えつつあり、外来者に時々見られたマラリアは1957年以後は跡を絶っている。

2) 肺結核は軽症の例が増え、重症例は減りつつある。肺外結核としてはリンパ腺結核が多く、骨関節結核はこれに次ぐ。

3) 性病の中では梅毒が一番多く(43.1%)、住民の V.D.R.L. 血清反応の陽性率は8%で台湾本島よりずっと高い。梅毒および軟性下疳が減少している一方、淋病および第四性病は増えつつある。

4) 腸内寄生虫の感染率は蛔虫が十二指腸虫よりも高いが(78.9%および6.7%)、臨床症状を呈するものは、十二指腸虫のほうが多く、腸内寄生虫症の53.6%を占める蛔虫症は14才以下の児童に80%、十二指腸虫症は20~29才の間に多く35%を占める。女の罹患率が高い。

論文審査の結果の要旨

澎湖島における気候の特異性と劣悪な生活環境が住民の疾病にいかなる影響をおよぼすかを究明するため、著者は最近8年間にみずから診療した患者98,375名につき統計的観察を行なった。

この地方では0~4才の幼児の罹患率が最も高く、つぎは外界と接触の多い20~24才の青年で、学令期の児童の罹患率は低い。

麻疹、水痘、ポリオのごとき伝染病は春先に多く、台湾本島の流行より1か月遅れて流行する。夏は腸炎、外傷、化膿性疾患、恙虫病が多く見られ、トラコーマ、気管支喘息、気管支炎、肺炎は季節風の激しくなる秋から冬にかけて増加する。

澎湖島の特殊疾患としてフィラリア症、恙虫病、癩病、多発性筋炎、アメーバ赤痢、ポリオ、結核病、性病、腸内寄生虫につき種々な方面から興味ある統計的観察を行ない、詳細にその結果を報告している。

このように本論文は学術的に有益なものであり、医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。